

化」を希望する人もいました。

七、帰国してから

終戦後丸三年と三カ月に及ぶ抑留生活中、二回書いた葉書の一通が家族のもとまで届いていたので、驚くほどのこともなく皆が生還を喜んでくれました。

その時点での家族構成は老父に妻と弟、妹であり、老父を除いてみんなが、なりふり構わず働かねばなりませんでしたが、私は「ソ連帰りの赤」という烙印を押されていて、行政官庁や警察から差別を受け、働く職場もなかなか見つけられませんでした。

特に警察は私の行動を四六時中尾行監視していたと、ずっと後（昭和五十年ころと思います）で警察署長をしていた軍隊当時の同僚から聞かされて啞然としたものです。そのとき、「では、俺が帰国して今までのような悪いことをしたのか？ また、君は私の思想についてどのように理解判断をしているのか」と詰問しましたが、そのことについて私の納得できる答えは返ってきませんでした。

かなり長い月日が過ぎて、どうにか職を得て、人並

みとは言えないにしても家を守り、子を育て、弟妹の婚姻も親代わりに片づけ、老父も妻も逝き既に二十年余りと過ぎ、これを書き残す時点の現在は、二人の「曾孫」の顔を見る立場となりましたが、振り返ってみますと、この間、実に半世紀近くの歳月が流れ去っています。

己の歩んだ人生は一体何なのか……

殊に、命を的に働いたソ連抑留を含む十年余りの間の諸々の出来事は、今の自分に何をもたらしたであろうか……と考えたりもします。

また、同じ思いや、戦争と抑留を体験して生き残り、もう残り少なくなりかけた余生を我々はいかに消日すべきか？……

戦い敗れるも祖国あり

新潟県 高橋 吉郎

一、シヤマンガにおける日本軍墓地の改修作業

イルクーツク第六收容所に收容されて四年目の冬と記憶しているが、イルクーツクから自動車で五時間ほどかかるところにシヤマンガというところがある。ここは人里離れた森林地帯であり、ここに一個中隊四百名ほどの日本軍がシベリアに強制抑留され、森林伐採の強制労働を強いられ、栄養失調で極度に衰弱した体にシラムがわき、これが媒介し発疹チフスが次々と伝染して蔓延したため百数十人という大量の死亡者が続出し、隊の三分の一ほどの犠牲者が出た悲惨な中隊があった。この悲惨な事故の死亡者が埋葬されてある日本軍墓地の改修作業に行ったことがあった。昭和二十三年の厳冬のころである。我々改修作業員五名とソ連兵の歩哨一名、ソ連人の地方人女性一名、同じく運転手一名、合計八名の人員が一隊となり、トラックの荷台に歩哨と我々が乗車し、運転席には運転手と女性の二人が乗車して出発した。厳冬のことから地表一メートルは凍結して鉄より固く、粉雪が吹雪となり吹きつける中を、シートをかぶってシューバ（防寒外套）で身を包み肩を寄せ合って声も立てずじっと耐える。ト

ラックは吹雪の荒野を目的地に向かつて進んでいく。小生のほか皆二十代の若さがみなぎっている若者であった。しかし、体感温度零下七〇度はあるだろう。シートをかぶってこらえながら疾走すること約五時間かかる。容易ならざることであった。

ようやくにして目的地シヤマンガに着いた。そこは森林地帯に囲まれた山奥のひなびた小さな集落であった。我々が下車したところソ連人の老人が近づいてきて、日本軍墓地の改修作業に来たことを知り、おびえるようなまなざしで、ヤポンスキーチーフでムノガーポメライ（日本人発疹チフスで多く死んだ）と語っており、当時の悲惨な状態をうなづくことができた。我々はロシア語はよくわからなかったが、老人の身ぶりなどや態度から恐ろしい事故であったことが理解された。これほど奥地に入ると、イルクーツク市から糧秣が運搬途中横流しされて満足に届かなかったことであつたらう。我々イルクーツク市街にいた者でも、一週間も二週間もキャベツにアワがからまっているようなものを主食として支給されたり、大豆ばかり飯ごう

の中ごうに一杯主食として支給され、これが一週間も続くため、足がガクガクして腰がふらつき歩行困難な状態となったり、牛や馬のえさのようなコウリヤンの原穀で皮のついたまま炊いたものを支給され、痔で苦しむ者が出たりしてひどい目に遭わされておりまして、これだけ奥地に入ると食糧も与えられず、森林の伐採という重労働を、ノルマ達成せよとダバイダバイ（やれやれ）と酷使されたことであろう。体力もすっきり衰弱し、入浴もさせられず、シラミがわき、発疹チフスが蔓延してバタバタと倒れ、帰らぬ人となつてしまつたのである。どれほど苦しかったことであつたらう。親兄弟、妻子のことを思つたら、せめて一目会つてと残念な思いで息を引き取つたことであつたらう。詔勅により停戦し、祖国に帰すと言つてだまされて抑留され、栄養失調と伝染病に苦しみ悶絶死せしめられ、恨みは永久に消えることはないであろう。我々はソ連とは戦争はしなかつた。一方的に不可侵条約を破棄して侵攻してきたソ連がなぜかかるむごいことをしなければならぬのか、理解に苦しむのみである。

さて、我々墓地改修作業隊員は、当夜はその集落の事務所のようなところで一泊した。当夜、ソ連人の女性がかねて携行してきた長さ三十七センチ、横二十センチ、厚さ一・五センチほどの板に番号を書いた墓標と名簿が記載してある書類とを照合し、これを点検して就寝した。翌日改修作業に墓地に向かつた。森林の奥に百数十体の土まんじゅうが並んでいた。土まんじゅうの頭部と認められるところに日本文字で、九州方面で鹿児島県…、以下風雪により文字は消え失せて読めない。またほとんどの墓標が風雪により脱落したり文字が消え失せて読み取れなかつた。ソ連人の女性の名簿により番号を書いた墓標を土まんじゅうに我々に指示して立てさせた。ソ連女性が携行してきた番号が書いてある墓標板をそれぞれ土まんじゅう頭に立て終えると、墓地の周辺に有刺鉄線を張りめぐらす作業を行ったが、極寒零下四〇度もあるところから、ややもすると有刺鉄線がポリポリ折れるなどのありさまであつた。かろうじてこれを張りめぐらしたが、なかなか容易ならざる作業であつた。

このような極寒零下四〇度という猛烈な寒さの中でも防寒外套に身を包み伐採作業をさせられた亡き戦友たちは、さぞつらかったことであつたらう。食糧不足で栄養失調となり、ふらつく体での作業は、立木が倒れるのを見ながらこれを避ける気力さえなく、木の下敷きになって死亡したとのことである。これはあとで同隊の将校に聞いたことであるが、余りにも悲惨な状態を想起させられる。人道に許されるべきことではない殺人行為に等しい。我々は作業を終了し、ひたすら手を合わせ亡き戦友のご冥福を祈った。

さて、我々は早朝から午後二時ごろまでかかり改修作業を終わり帰途についたのであるが、墓標に番号を記入してめいめいに立てさせたので、ソ連当局では図面ができており、それによって遺体を確認することができるので、我々が改修を行ったシヤマンガの墓地は容易に本人を確認することができると思われる。

我々は帰途に向かったが、往路より以上の猛吹雪になり、トラックの荷台でシートをかぶり、体感温度零下七〇度は優にある吹雪の中をじっと耐えて声も立て

ず、お互い肩を寄せ合っていた。出発してから二時間くらいたったかと思うころ、運転手と歩哨がけんか口論となり、体感温度零下七〇度もある吹雪の車外に出てつかみ合い、もみ合い、さては組みつき、殴るけるの大げんかとなった。幸い歩哨は銃には手をかけなかったが、三十分は優につかみ合い、もみ合っていた。

我々はどうなることかと案じていたが、ようやくけんかはおさまった。寒さになれている彼らが極寒の吹雪の中で平気でけんかしている姿には、まったくあきれ果てた。ところが、我々の隊員の中に凍傷になるおそれのある隊員が出てきた。凍傷にかかると切断手術をしなければならぬ。全員でその隊員を凍傷から防止するため、全力を尽くして交代しながら患部の摩擦に努めた。幸いにも血液が戻り、白くなっていた患部が赤みを帯びて、これを防止することができた。一同ほつとした。ソ連人三人はトラックの運転台で暖かいからよいが、我々はトラックの荷台で暖房もなく、凍傷を防ぎながら一刻も早い帰所を祈ってじっと耐えていた。もう冬の日は暮れてシートの上をビュービューと

吹雪がうなりながら去っていく。ようやく街の明かりが見え始め、やつのこと帰所することができた。

こうしてシヤマンガの日本軍墓地の改修作業は終わったが、大量の犠牲者を出したシヤマンガの伐採作業に従事した中隊が後でイルクーツクに移駐して、ミヤソコンビナート（製肉工場）で作業していた同隊の将校に会うことができた。同氏は人格、識見とも立派な軍人であった。同氏の語るところによれば、我々の部隊はシベリアの奥地に連行されて銃殺されるのだというわさが流れていたと憤怒の涙を浮かべ物語った。結局、食糧不足のところ、重労働と非衛生という悪い環境から栄養失調となり、発疹チフスがシラミの媒介により蔓延し隊員が次々と倒れてしまった。骨肉を分かち合った肉親以上に、生死をともに祖国のため、天皇陛下のために生命を捧げて激戦で奮戦し華々しく散る覚悟であったものを、ソ連の不法侵攻とだまし打ち的強制抑留という、かかる惨めな屈辱的仕打ちによって大量の尊い戦友を犬死にせしめたことは残念でたまらないと切々と訴えていた。小生は全く同感である。戦

いの場で名誉の戦死を遂げることが軍人としての本望であるのに、かかるむごい死を遂げて、弔う人もなく、シベリアの森林地帯の奥地に、しかも凍土の地下に寂しく永眠をせしめられた戦友の霊はすすり泣いていることであらう。

二、シベリア抑留者に対するソ連の共産主義宣伝 工作

ソ連は、日本軍に対し強制抑留し労働をせしめると同時に、共産主義の宣伝工作を命じ、我が国をソ連の属国にせんと企図していたことは明らかであった。戦争によらず、国民の思想を共産主義化し容易にこれをものにせんとしていた。ソ連が抑留日本軍に対して共産主義の宣伝工作を開始したのは、場所によつて異なるが、イルクーツク第六收容所の場合は、昭和二十一年の秋ごろではないかと記憶している。

最初は、日本新聞なるものが、何にも読むものがない收容所に、我々抑留生活になれてきて活字に飢えている者たちに輪読せよと渡された。部数も少なく回覧のようにして読むようにした。話によれば、ハバロフ

スクにおいて日本共産党の幹部で宮本顕治なる者が責任者として発行しているとのことであつた。ソビエト人民の歩いてきた道、レーニン・スターリン主義の解説がわかりやすく連載的に載っている新聞で、それをソ連の国家機構などがパンフレットにして抑留者に読ませるようにした。これをもとにして討論会や自己批判などが日曜日になると活発に行われるようになり、また壁新聞などをつくり抑留者の意見などを載せたり、アクチーブと称して抑留者の中から工作員を指名して共産主義の宣伝に努めさせており、これらの者はまたソ連のスパイ的存在でもあつた。

憲兵、警察官などの前歴者は反動と称して共産主義者にはならないと言つて、反動摘発をした者は帰してやるこのことで、小生は現職警察官から召集されていたのであるが、憲兵准尉の分隊長から身分を農民として経歴書に書いて出すように言われ、身分を隠して出したものが摘発されて、ソ連政治部の将校に特高警察ではないかと執拗に食いが下がられて取り調べを受けたが、頑強に否認してようやく取り調べをやめた。その

後は取り調べはなかつたが、昭和二十三年の秋には、憲兵、警察官の前歴者は一般抑留者と分離されて、イルクーツクからチェレンホーボに移送された。

日本新聞には日本は既に共産主義国家になっているかのごとき宣伝を記事にして、抑留者に輪読させていた。日曜日になるとデモの練習を抑留者にさせ、渦巻きデモなどの堂に入ったデモをさせワイワイと騒ぎ立て、赤旗を立てその盛り上がりをおおりに立てて異様な情景を醸し出すなど、全く苦々しい限りであつた。しかし、これに同調したごとく行動してはいないと再び強制労働の奥地に送り返されることが明らかであつた。

また、食堂に食事のため並んでいる際も日本新聞を輪読させられ、食事している際にも労働歌の音楽が流れており、朝食を済ませ作業に出発する際も赤旗を掲揚して労働歌を歌いながら出発する。作業が終わり帰所する際も労働歌を歌いながら入所する。夕食が終わると時々映画を見せたが、それも革命で勝利をおさめたものなど、徹底した宣伝工作の連続であつた。共産主義こそ最もすぐれたものであり、共産主義でなければ

夜も日も明けぬというような熱氣にあふれ、若い抑留者などは涙を流して共鳴しているありさまを見て、何をたわけたことをと苦々しく感じていたが、表面は同調を装うようにするより仕方がなかった。

これは小生のみではなく、心ある者はすべてそうであつたと思つている。日曜日になると反動つるし上げと称して、元満州建国大学教授や北海道警察本部長などの偉い人が広場に引き出されて、自分のせがれのよくな若造が目をもいで悪口雑言を浴びせかけ、洗脳された者たちが目をつり上げて怒声を浴びせかけるが、偉い人たちはさすがに微動だにしなかつた。当時の氣違ひじみた行動をとつた者たちは今どうしているか。日本人はどん底へ落ちると、かくも弱く裏切り行為に出るものであるかと痛感させられた。

三、飯ごうは一類兵器なり

小生が軍隊に入つて満州に渡り初年兵教育を受けた最初のころで、まだ右も左もわからず毎日ビシタの雨が降りおたおたしているころ、内地から慰問袋が来て支給された。開けてみるとマカロニが入つていた。連

日の訓練で活動が激しく、空腹にもかかわらず一膳めしであつた。教官は少尉で、分隊長は軍曹で班長であつた。熊坂軍曹という人で、名のとおり大柄のクマのような男であつた。班員は兵長一名、上等兵三名、以下初年兵であり、分隊が班を構成していた。兵長、上等兵は分隊長のもとで教官の少尉の助手をして我々初年兵の教育をしており、兵長、上等兵は班付といつても威張つていた。小生は慰問袋の中に入つているマカロニについて班付上等兵のところに行き「上等兵殿、慰問袋の中にマカロニが入つておりましたが、どうしたらよくありますか」と伺いを立てたところ、上等兵は「そうか、それはせっかく内地から送られてきたものだ、飯ごうに入れて煮て食べろ」と言われたので、早速ベチカの上に飯ごうに入れたマカロニを載せたが、石炭が粉炭で火力が弱くなかなか煮えなかつたので、たき口のところに飯ごうを入れておいたところ、間もなく点呼が来て週番士官の少尉が下士官を伴いつて来た。そしてベチカのたき口に入れてある飯ごうを見つて、えらいけんまくで「一類兵器を……。あとで

熊坂（班長）、わしのところへ来い」と居丈高に怒鳴りつけて次の班に行った。小生は内心、これはえらいことになった、軍隊というところはえらく階級の差別のあるところだ、たかが一年志願の少尉あたりが、まるで封建時代の殿様のようにわずかのことで威張り散らすところであると思つた。

部隊の点呼も終わり、就寝ラッパが鳴るの間がないころとなり、一日の訓練も終わり疲れてぐっすりと眠りに入るころとなつた。ところが、くだんの週番士官のところに行つて帰つてきた班長が顔青ざめて目を怒らせ、班付兵長以下上等兵、初年兵の班員全員を正座せしめ、全体責任と称して就寝時間にもかかわらず制裁処置をとつた。長時間の正座で恨めしそうに小生の顔を見るが何ともいたし方がないし、小生は班長のもとにわびようと思つたが、どうしても納得がいかなかった。飯ごうで煮て食べろと指示した班付上等兵が「自分が指示したのであります」と班長に申し出てくれれば事が済むものをと、軍隊に入るまで犠牲的精神で徹底的に教育を受けて警官になつた小生は、これで

はとでもと思つた。入隊早々目をつけられてしまい、それからとはとても厳しくなり、ピンタどころか、帯剣のさやのついたまま頭部を数回殴られるなどされた。それも故意でない不可抗力なことであるにもかかわらず感情的に制裁を受けて、勇躍入隊してきた軍隊がすっかり嫌になつてしまつた。

当時の軍隊は、どうしたわけか警察官に対してひどく反感を持つていた。厳しい零下三〇度の極寒における初年兵の猛訓練も終わり、下士官志願や憲兵志願をする者もあつたが、小生は志願する気になれなかつた。中には一年志願をして士官を目指す者もいたが、一期の検閲が終わると一つ星が二つ星となり、二等兵が一等兵となつた。貨物廠の警備勤務で西東安というところに分遣隊に編成されて出発した同年兵は、昇進を目指して喜々としていたが、小生は軍隊ではうだつが上がることはないと思つて、ただ黙々とお国のために働いた。

昭和十八年十月二十日に渡満し、同二十年八月、四平街に移駐した。同所で終戦となり武装解除を受け、

陽木林に集結し、同九月二十七日満鉄に乗り、黒河から黒龍江を渡り入ソするのであるが、問題の飯ごうも水筒とともに着装し、長いシベリアの抑留生活に入ったのである。軍隊では冒頭から飯ごう問題でケチがつき、すっかり嫌になり、不満が常に内在しておもしろくなく、うだつが上がらなかったが、シベリアに抑留されるや、よし、これからは警察で訓練を受けた犠牲的精神を発揮して戦友のためにならうと、不思議とかたい決意を持つようになり、おのずから勇氣もわいてきて、活動するたびに作業隊の責任者を引き受けた。まかり間違えば銃殺は覚悟の上であった。この責任を果たすために飯ごうが何ほど役に立ったことか教知れないのである。ひそかに馬鈴薯を入手して煮て食したり、シベリアの野草を飯ごうに入れて岩塩で味つけして食し飢えを凌いだり、火で温めると水のようになってしまう昼食のアワがゆを腰にぶら下げて作業場に五キロの道を歩いて通ったり、飯ごうは常に我が身から離さず、命を救ってくれた大切な恩人にもまさるものであった。まさに天皇陛下の一類兵器であった。

思い出深い、何よりも大切にしていた飯ごうを、帰還船栄宝丸で日の丸梯団に持ち去られてしまった。ソ連の宣伝に乗せられて共産主義に共鳴した赤旗組と、軍国主義を最高のものとする日の丸組（日の丸梯団）とが、帰還船の中でワイワイと騒ぎ喧騒にわたっていた。赤旗組は要求貫徹と称して上陸を拒否し、彼らのために上陸ができなかった。岸壁の向こうでは幼い子供たちが日の丸の小旗を振って「兵隊さん、おりてきてー」と叫んでいるのを見てまぶたが熱くなった。シベリアは零下二〇度もあるのに、内地は青々として祖国の山々が絵のように浮かんでいる。

ようやく騒ぎもおさまり上陸することになったので、甲板に出て、赤旗組でも日の丸組でもない人たちが「お世話になりました、元気でまた会いましょう」と名残り惜しくあいさつを交わし別れを惜しんでいる間に、日の丸組はさっさと上陸してしまった。甲板から船倉において自分のいた場所に戻ってみると、あれほど大切にしていた飯ごうが日の丸組に持ち去られたものに見える。足かけ七年の歳月行動とともに

した命の恩人に等しい天皇陛下の一類兵器がなくなつて全く残念であつた。何よりも大切な宝として、尊い記念品として末長く大切に保存したかつたのである。

小生は、前述したが、初年兵当初飯ごう事件があつてからは軍隊に反感を持つて、消極的であつたが上がらなかつたが、抑留されると人間が変わつたようになつた。自分でも心外と思うほど不思議であつた。皆意気消沈して肩を落としていたが、小生はコマネズミのようになつて行動した。手前みそのようであるが、武装解除を受けて混成部隊となり、憲兵隊や他部隊の中尉、大尉が幹部となつて抑留され収容されたが、小生の行動が目立つたのか、まことに幹部の受けはよかつた。特に憲兵准尉の分隊長は人格者であつたが、小生を信頼してくれた。人間というものは信頼されるとますます一生懸命になるものである。結局、条件のよいところに出て活躍することになる。

ソ連の歩哨がつかない、ビスカノボーイといつて収容所を出る際サインをして作業隊の責任者として作業に出るので、ある程度自由がきくのである。小生は小

柄で風采も上がらず貫禄もなく、一見して少年のような男でお人よしであつたが、常に笑顔で人に接するため人々にかわいがられた。隊員と笑顔で接し、怒るところとはしなかつた。隊員と心をつにしてお互いに助け合い譲り合つて和を大切にした。気が早い性分なので、時々失敗して隊員にしかられる作業隊長であつた。反面、ソ連に対しては命がけでぶつかつていった。無鉄砲の小生であつたが、独身で身軽であつた。妻子のある隊員は国でどんなに帰りを待っているだろうかと思つくと、無事で一日も早く帰つてもらわなければならなつと心に固く誓つていた。このような心構えで行動すると隊員の団結も強くなり、力が倍加されて能率が上がり、すべてがうまくいくことを体験した。小生は次々と変わる作業隊の責任者となつたが、隊員に一人の犠牲者もなく、また負傷者も大したことはなく、無事に祖国に帰還することができたのである。

抑留当初は軍隊の階級が残つていたが、次第に将校は分離され、下士官・兵になつた。すべてが平等で階級はなく、作業隊の責任者が一人、ソ連側と折衝する

ことになっていた。小生は、軍隊での階級の醜さを見せつけられ、苦闘の抑留生活も、精神的には戦友同士の心温まる思いの中で過ごすことができた。人間はいかなる苦しいことがあっても、心さえ豊かであれば神仏は救ってくれると思う。当時の戦友諸氏はどうしておられるだろうか。この紙面をかりてよろしくと申し上げる次第であります。ご壮健を祈念しております。

【執筆者の紹介】

出生地 新潟県中魚沼郡川治村大字城之古七九三番

地(現 新潟県十日町市大字城之古七九三番地)

現住所 新潟市上木戸五丁目十七番一号

生年月日 大正七年一月二十四日

学歴 川治尋常高等小学校高等科卒業

経歴

出征当時は、父母、祖母、兄弟姉妹、計十二名であり、父は農業を経営し、田畑三町ほど耕作し、小作にも田畑を耕作せしめ年貢として何俵かのを収納し、

小地主的な存在であった。

右本人は、高小卒業後家事農業に従事し、昭和十七年五月一日新潟県巡查を拝命し、同年九月一日付で教習所を卒業とともに新潟警察署へ配置となり、現職一年で、昭和十八年十月五日召集により会津若松東部二十四部隊に入隊し、同年十月二十日満州東安第一三八七部隊に転属した。

昭和二十年八月八日四平街に移駐し、終戦となり、武装解除を受けて陽木林に結集し、同年九月二十七日同所を出発、満鉄に乗り北上し黒河にて下車。黒龍江を渡りソ連ブラゴエシチェンスクに上陸して、シベリア鉄道によりイルクーツクにおいて下車。抑留生活に入り、製材・煉瓦積み作業、火力発電所の石炭作業、チェレンホーボにおいて建築の基礎工事、ハバロフスクにおいては建築作業、水道工事作業などをやり、昭和二十四年十二月四日栄宝丸で帰還、舞鶴に上陸した。

昭和二十四年十二月、日は記憶していないが、復職のあいさつに新潟警察に行き、新潟警察隊に復職した。昭和五十年三月三十一日付けをもって新潟県巡查を退

職、任警部補となった。以後、今日に至る。

家庭は現在妻と二人暮らし。長女は嫁ぎ、長男は千葉に世帯を持って夫婦と娘二人で生活している。

(新潟県 吉田 忍)

私の青春時代記

新潟県 周 佐 吉 三

私は新潟県中蒲原郡川内村字暮坪十七番地に大正十年に生まれ、川内尋常高等小学校を卒業、その後村松町にある片倉製糸工場に入社して、以来入隊まで勤めていました。

家族は、母と兄二人、妹二人、私と、六人家族で生活をしておりましたが、兄二人は既に現役入隊を終わりに帰家しました。私は昭和十六年十二月一日に新発田の歩兵第一六連隊に集合のため仮入隊して、一週間後の十二月八日、大東亜戦争が勃発して、兵舎内は古参兵が戦場への準備のため完全武装をして営庭に集合整

列、服装点検の後、新発田駅方面へ出発したものと思っています。そのような混乱の中、私どもも同日午後三時ごろ駅へと出発いたしました。私どもの兵器は、二人で一丁の小銃と剣が支給されました。飯盒の代品として柳行李（ごうり）の小さな入れ物が全員に配給されると、今度は北支から初年兵を受領にきております下士官に引率され、新発田駅より臨時列車に乗せられ、汽車の窓は木の鏡戸を下げさせられ外を見ることができず、どこを走っているのか全然わかりませんでした。また、毎日汽車の中で下士官にいろいろと銃の取扱いを習い、また注意もされました。

着いたところは宇品港で、そこから船に乗せられました。船は漁船で魚の臭いと、また予防接種は三種混合と行先不明の緊張なども混じって船酔いがひどく、全員柱につかまって、風呂桶のような物に吐いて私はひどい目に遭いました。

いよいよ釜山港に上陸して学校のような建物で休息して、夕方、駅から満州經由で北支に入り、南口鎮というところで初年兵の教育隊に入隊。四カ月の教育を